21

十九世紀後半の神奈川県における天然痘と種痘の状況

川部裕幸

種痘の歴史は医史学では早くから注目され、精力的な探究がなされてきたテーマであったが、その研究視点は、種痘法の最初期の導入過程やそれに尽力した医師や指導者の活躍に焦点を当てるものが多く、民衆の間にどのように浸透していったのかを追究した実証的研究は少ない。また、天然痘の発生状況に関しては、全国的に衛生統計が整えられる明治九年以前においては、社会的大事件となった大流行を除けば、死因記入のある寺院過去帳を素材とした研究が中心であった。しかし、過去帳に基づく研究においては、もし病死者が出ていなければ、天然痘の発生を知ることはないという短所が含まれている。

神奈川県立公文書館には、極めて限られた小地域ではあるが、一八五〇年代から一八七〇年代にかけての、天然痘の発生状況と種痘の普及過程が、数量的に確認できる史料が保管されている。この史料は、一八七五（明治八）年一月に足柄県（現神奈川県西部）が出した種痘徹底に関する布達を受け、各村ごとに戸長（村の責任者）が、住民の種痘接種状況と天然痘既患者を取り調べ、県に報告したものである。種痘者に関しては、それぞれの名前と接種年月と満年齢、そして種痘医あるいは種痘場所が列記してあり、天然痘既患者については名前と罹患年月と満年齢が書き上げられている。理由は未詳であるが、取り調べ対象者は、一八七五年四月の時点で満二五歳以下の者に限られているが、他の史料と照合してみると、その年齢層に該当する者に関しては悉皆調査がなされていると思われる。

この「天然痘・種痘取調書上」の史料が残っている村は、管見の限りでは萱沼村・中山村・宇津茂村（以上三村は現松田町北部の大字）・柳川村・三廻部村（以上二村は現秦野市西部の大字）・谷ヶ村（現山北町南西部の大字）の六つの村だけであるが、ここでは記録が最も整ってい

る萱沼村を取り上げて、天然痘と種痘の状況を報告してみたい。なお萱沼村の人口は、天保初期（一八三〇年代）には家数三八軒、明治初頭は不明であるが、一八八七（明治二〇）年では、家数はほぼ同数、人口は二一五人前後と推定される。

「取調書上」に登場する最初の流行年である一八五五（安政二）年から、この史料が作成された一八七五年までの天然痘罹患者と種痘者の人数を各年ごとに記すると次のようになる。括弧内の／の上の数字は天然痘の罹患者数、下の数字は種痘者数を表す。一八五五年（八／〇）、五六年（四／〇）、五七年（二／〇）、五八年（二／〇）、五九年（〇／四）、六〇年（六／〇）、六一年（一／〇）、六二年（五／〇）、六三年（二／〇）、六四年（二／三）、六五年（一／四）、六六年（一／四）、六七年（〇／二）、六八年（一／四）、六九年（〇／一）、七〇年（〇／六）、七一年（〇／七）、七二年（〇／〇）、七三年（〇／〇）、七四年（〇／一一）、七五年（〇／一三）。

萱沼では五五年から六八年まで、二年間を除いて各年天然痘が発生している。ほぼ連年で発生を見るという傾向は三廻部村や谷ヶ村でも同様である。しかし、山間の一番奥に位置する宇津茂村だけは二〇年間に二回のみの発生という集中的な流行パターンを示している。萱沼の天然痘罹患平均年齢は約二歳八か月であり、罹患季節は十二月から五月にかけてが全体の約八〇％を占める。

一方、種痘は五九年の四名が先駆的であるが、定着したのは六四年以降と見ることができよう。萱沼村・中山村・宇津茂村・三廻部村とも、六三～六四年頃から種痘が一般的に普及し始めたと考えられ、普及後三年から八年を経ると、天然痘の発生が見られなくなり、以降七五年まで数年間、罹患者は一人も出ていない。種痘医には、近隣町村の約二〇名の名前が挙げられており、小田原藩領内では、種痘が民衆の間にまでかなり普及していたことが窺える。

（成城大学民俗学研究所）